

# 帝政前期ローマにおける皇帝名の削除と宗教祭司団記録

福山 佑子

はじめに

古代ローマでは政治と宗教が密接に関連していた。特にアウグストゥス以降には、最高神祇官としての皇帝の存在や皇帝崇拜などにより、その境界はより曖昧になっていったとされる<sup>(1)</sup>。このような状況の中で、元老院議員たちは宗教祭司団員として皇帝崇拜に携わること帝政期の皇帝制度を支えていた。しかし同時に、皇帝を「悪帝」として断罪し、彼らに対するダムナティオ・メモリアエを決議することにより、皇帝のメモリア（記録・記憶）への攻撃も行っていた。その結果、断罪された皇帝の彫像の破壊、碑文からの氏名の削除などが行われ、彼らが生前に残した記

録物の多くは失われることとなった。

このダムナティオ・メモリアエは元老院で決議されたものである。しかし先行研究では、この処分における元老院議員たちの動向はほとんど検討の対象となっていない。その理由としては、断罪された皇帝のメモリアを貶めることで、次に即位した現皇帝を称揚するというこの処分の性質と、皇帝の意向が処分の実施に大きく作用したという理由により、元老院よりも皇帝に対して関心が向けられてきたことがあげられよう。しかし、ダムナティオ・メモリアエは皇帝が大々的に主導したわけではなく、元老院決議を経るという手順が必ず存在していた。そのため、この処分を考えるにあたっては、元老院議員自身がこの処分にどのような向き合ったかという問題を看過してはならないだろう。

そこで本稿がとりあげるのが、元老院議員たちが団員となっていた宗教祭司団の記録である。アウグストゥス祭司団、アントニヌス祭司団、及びアルウル兄弟団の記録が現存するが、いずれの祭司団も皇帝崇拜と密接にかかわっていた。<sup>(2)</sup> 皇帝との繋がりも深いこれらの団体の記録において、断罪された皇帝の氏名の削除はどのように行われたのだろうか。この点を検討することから、元老院議員たちのダムナティオ・メモリアエへの向き合い方を明らかにしてみたい。

## 一 先行研究と問題の所在

元老院が決議したダムナティオ・メモリアエによって、断罪された皇帝の名字が記された碑文が公の場から姿を消したことは、ネロやドミティアヌスのような皇帝たちの現存する碑文数が、他の皇帝に比べて顕著に少なくなっていることから確認できる。<sup>(3)</sup> 記録を破壊するという処分の性質上、このダムナティオ・メモリアエがどのように行われたかを知るのは困難である。しかしこれまで、彫像や碑文における破壊や削除の痕跡を用いながら処分の実態を明らかにする試みがなされており、碑文からの氏名の削除についても様々な研究が行われてきた。

断罪された皇帝の氏名の削除を包括的に取り上げたカヤヴァは、碑文からの氏名の削除の実態を次のようにまとめている。<sup>(4)</sup> まず、氏名の削除は組織的に行われたわけではなく、ダムナティオ・メモリアエが決議された際も氏名の削除は公式に強制されたわけではなかった。氏名の削除はまず人目につく場所のものが対象とされ、首都ローマ、イタリア半島の主要都市、属州首都において削除の実施率が高い。また、徹底的に氏名を削除することよりも、皇帝の断罪を象徴的に示すことを主眼としており、組織的な削除は行われなかったというものである。この意見は私的な場における記録の残存を根拠とするフィッティングホフの見解を端緒としているが、以降の研究者もこの見方に従っている。<sup>(5)</sup> また、ボーデルは元老院決議が属州などに明文化されて伝達されたかは定かでないとしているほか、フラワーム氏名の削除がローマ世界で慣習的に広く行われていた行為であった可能性を示唆している。<sup>(6)</sup>

このように公的に強制された処分ではなかったとされる一方で、碑文史料の分析からは時代ごとの特徴や変化が指摘されている。首都ローマにおけるネロの碑文の処遇を検討したエックは、現存する事例は少ないものの彼の碑文は彫像などと共に公の場から全て撤去されたとしており、ローマ以外においても公的な性質を持つ碑文の大半で彼の

氏名は削除されたとしている。<sup>(7)</sup> ドミティアヌスの碑文を研究したマルタンは、現存する一五五点の碑文における氏名の削除を分析し、統治初期には半分以上の碑文で氏名が残されているのに対し、統治の末期では半数以上が削除されていることから、元老院の決定に従ってダムナティオ・メモリアエを行った人々は、特に作られた時期が新しい碑文を処分の対象にしていたのではないかと述べている。<sup>(8)</sup> ゲタの氏名の削除を検討したマステイーノは、彼の氏名がほぼ全ての碑文から削除されていることを示した上で、時にはセウエルスの同名の弟も彼と混同して削除されるほど処分が徹底されていたほか、削除の痕跡を別の文言で上書きした例が多いことがゲタの氏名削除の特徴であることを示している。<sup>(9)</sup> ゲタの事例の大半において削除箇所への上書きが行われていることから、この時期には断罪された皇帝の氏名を他の文言で上書きする行為がほとんど常態化していたとする見方も生まれている。<sup>(10)</sup> また、パピルス文書においてすら氏名の削除が行われるほど処分が徹底していたことも知られている。<sup>(11)</sup> 属州や時代ごとの碑文からの皇帝氏名削除を取り上げたブノワも、神格化と時を同じくしてダムナティオ・メモリアエも従来より組織的に行われるようになり、三世紀には氏名の削除が慣習化したとしており、フラワールも同様の見解である。<sup>(12)</sup> このように、近年ではゲタを中

心としたセウエルス期に、ダムナティオ・メモリアエと断罪された皇帝名の氏名の削除は大規模かつ従来よりも組織的に行われるようになったという見方が有力である。

しかし、そもそも先行研究で変化が生じたとされている三世紀初頭は「碑文習慣」が興隆した時期であり、従来よりも多くの碑文が作られるようになっただけでなく、記録物に対する認識も変化した時代であるとされている。<sup>(13)</sup> それゆえ、氏名の削除が以前よりも徹底して行われた背景には、このようなローマ社会の変化が存在した可能性もあるだろう。したがって、この時期にダムナティオ・メモリアエになんらかの変化が生じたかどうかを考えるならば、まずはこの処分を決議した元老院議員たちが関与した記録を分析し、この決議自体になんらかの変化が存在したかを確認する必要がある。そこで次節以降では、アウグストゥス祭司団、アントニヌス祭司団、アルヴァル兄弟団記録を具体的に分析しながら考察を進めていきたい。

## 二 アウグストゥス祭司団記録における 皇帝名の削除

アウグストゥス祭司団は、後一四年のアウグストゥスの死後に創設された。<sup>(14)</sup> 創設時の団員は指導的地位にある市民

の中から籤で選ばれたとされる。<sup>(15)</sup> 祭司団員の任期は終身で、団員数は当初二一名であったが、この定数に追加されて加入した団員もいるため時期によって変動がある。新規団員は元老院決議によって加入していたが、皇帝の書簡によって選ばれていたため、実質的には皇帝の意向に沿っており、皇帝自身も即位すると祭司団に加入していた。また、毎年団員の中から幹事が選出され、儀式の実施において主導的な役割を果たしていた。<sup>(16)</sup> この祭司団の主な役割は神格化された皇帝の崇拜であり、宗教的な側面から皇帝や帝位継承を支えていたとされる。<sup>(17)</sup> 彼らは皇帝崇拜に係る様々な儀式のほか、皇帝以外の帝室の人物に対する葬祭儀礼や健康祈願なども行なっていた。例えば、ゲルマニクスの命日に犠牲式を行ったことや、カリグラによるアウグストゥス神殿奉獻の際に皇帝がアウグストゥス祭司団と同じ席に座っていたという記述も残されており、帝室祭祀全般に携わっていたとみられる。<sup>(18)</sup> ローマ郊外のボウイッラエには彼らの宗教施設があり、一世紀末から二世紀にかけて多くの神殿や宗教建築物が建設され、競技場や劇場の遺構も見つかっている。<sup>(19)</sup>

この祭司団では、団員加入記録と幹事団員記録が現存している。<sup>(20)</sup> 団員加入記録は一五九六年にローマのサン・ピエトロ大聖堂で存在が確認された記録しか残っておらず、当

初の所在は不明である。<sup>(21)</sup> 一方、幹事団員記録は現存する五点のうち三点が祭司団の施設があったローマ近郊のボウイッラエで出土しており、この場所に設置されていた可能性が高い。<sup>(22)</sup> 団員加入記録は番号ごとに分けられており、二七番と二八番の団員についての記録が残されている。記録には、加入した団員の名前、執政官暦と建国暦が記されている。二七番の記録は、五一年に元老院によってネロが団員になることが決議され、団員定数が一人追加されたという記録から始まり、二三〇年にクイントゥス・ペトロニウスが加入したという記録で終わっている。二八番の記録は、七一年に元老院によってティトゥスが団員になることが決議され、団員定数が一人追加されたという記録から始まる。しかし、彼の団員枠には後任がおらず、八一―一九六年の記録はない。その後、一九七年に元老院による定数追加という形で皇帝即位前のカラカラが就任する。彼以降は後任が選出され、一二九年にクイントゥス・アラディウス・ルフイヌスの加入で記録は終わっている。幹事団員記録には、執政官暦と幹事の名前、祭司団の創設何年目かが記されており、現存するのは、一七一―一八年、六四―六六年、六八―六九年、一三六―一三八年、二一三―二一五年の断片のみである。

この団員加入記録では、断罪された皇帝の内、ネロ、ド

ミティアヌス、マクリヌスの名が消されている。ネロとマクリヌスは祭司団員として加入したという記録が、ドミティアヌスは執政官暦における名前が消されている<sup>(23)</sup>。また、皇帝以外の人物ではあるが、幹事団員記録では六五年の執政官であったマルクス・ユリウス・ウェステイヌス・アッティクスの方が執政官暦から削除されている。彼はネロの妻となったメッサリナの最初の夫で、ネロは彼女と結婚するために彼を殺害したとされる<sup>(24)</sup>。これらの氏名の削除からは、記録に残すべきでないと考えられた人物の記録は基本的には削除するという方針が浮かび上がってくる。

その一方で、セウエルス・アレクサンデルは執政官暦における氏名が無傷で残されている。彼の死後に団員であった可能性のある人物は三名判明しており、クイントゥス・アラディウス・ルフイヌス・オプタトゥス・アエリアヌスは補充執政官とシリア属州総督を務めているが、マルクス・カエセリウス・ラエリアヌスは二七才で夭逝しているため目立った職歴はなく、父親もペルフエクティッシムス級の人物であるため、経歴が判明している祭司団員の中では見劣りがする<sup>(25)</sup>。二二〇年から祭司団員を務めたクイントゥス・ペトロニウス・メリオルの詳細な職歴も判明しているが、軍関連の経歴が多く補充執政官を最高の経歴とする人物である<sup>(26)</sup>。断片的な情報しかないが、目立った経歴の

ない元老院議員がキャリア初期に団員に着任していることから、この時期に祭司団の重要性が低下していたことをうかがわせる。現在のこのような史料状況では、祭司団全体の重要性の低下が作用した可能性しか指摘できず、アレクサンデルの記録が残された明確な理由は不明である。しかし、六五年の執政官の記録が削除されているにもかかわらず、彼の記録が残されていること。特に、氏名の削除が徹底されるようになったと言われる三世紀初めに彼の名前が残されたということは注目に値しよう。

### 三 アントニヌス祭司団記録における 皇帝名の削除

アントニヌス祭司団は、一六一年のアントニヌス・ピウスの死後に新たな皇帝崇拜祭司団として設立された<sup>(27)</sup>。彼らの主な職務は神格化された皇帝に捧げる儀礼であり、セウエルス朝とアントニヌス朝の神格化された皇帝たちに対する崇拜に携っていた<sup>(28)</sup>。団員の任期は終身で、人数や活動内容はアウグストゥス祭司団と同様であったと考えられている<sup>(29)</sup>。彼らはフォルムのアントニヌスとファウスティナ神殿を本拠地としており、ここに祭司団関連の記録も保管されていた<sup>(30)</sup>。創設時の団員は皇帝と親しい人物や有力者で占

められており、団員であることが判明している皇帝関係者以外の一三名の内、七名は正規執政官経験者で、二度執政官職を務めた人物も四名おり、六名は補充執政官経験者であるが、アジア、アフリカ、シリアといった重要属州の総督を務めている。首都長官就任者も三名いるなど、祭司団創設時には元老院議員の中でも卓抜した存在の者ばかりで構成されていた<sup>(31)</sup>。

この祭司団についても、祭司団員加入記録が二点残されている。一点目の碑文はコンモドゥスの名が記されたと考えられている断片で、二〇一一年に公刊された<sup>(32)</sup>。これはフォルム脇にあるアンテイクアリウム・フォレンセに所蔵されており、出土地と時期は不明であるが、現在の所蔵場所から、おそらくアントニヌスとファウスティナ神殿かフォルム内で発見されたと考えられている<sup>(33)</sup>。この小さな碑文の断片には、コンモドゥスの名前が刻まれているが、現存するアントニヌス名は一度削除され、後に前後の行とは違う彫り手によって刻み直されている。これは、セウエルスによるコンモドゥスの名誉回復を反映して行われた作業の結果であろう。二点目の碑文は一八二四年にカピトリウム丘で発見されたもので、二一三年から二一六年にかけて五人の団員が加入したことが記されており、個々の字体が異なっていることから、それぞれ個別の時期に刻まれたこ

とがわかっている<sup>(34)</sup>。ここに記載されている団員は前任者の死去にともなう新規団員加入という形式ではないため、全ての団員の加入が一枚の石板にまとめて記入されていたとみられる。加入記録では、最初にガラティア属州総督を務めたルキウス・エグナティウス・ウィクトル・ロッリアヌスの名が挙げられる。彼に続く四人は皇帝やその関係者であり、エラガバルス、セウエルス・アレクサンデル、マクシムス・トラクス、彼の息子のマクシムスが加入したことが記されている。いずれも執政官暦、建国暦、加入日、加入場所としてアントニヌス・ピウスとファウスティナ神殿が挙げられ、最後に元老院決議によって当該団員が加入したと記されている。

この記録のエラガバルスの団員加入について述べられた箇所では、彼のマルクス・アウレリウス・アントニヌスという名前内、アントニヌスの箇所のみが削り取られており、これは彼がアントニヌス家の一員とされた事を否定する意図が反映された結果であると考えられる。続くセウエルス・アレクサンデルの加入についての箇所では、少なくともアレクサンデルの箇所が削除されていることが確認できる。マクシムス・トラクスの加入についての箇所では、彼の名前は全て削り取られている。最後のマクシムスの加入についての箇所では、まず執政官暦のマクシムス

の名前は完全に削除されており、マクシムスの名前も全て削り取られている。このように、断罪された皇帝の名前は全て削除されており、名誉回復によって再刻されたコンモドウスを含め、全てが元老院決議に則った形で記録されている。また、当初は氏名の一部のみが消されていたのに対し、時代が下るに連れて断罪された皇帝名は氏名全体が消されるようになっていくということも確認できる。

現存する団員加入記録はコンモドウス以降のものであり、この時期に団員であった帝室関連以外の人物は七名が判明している。一九五〇年頃まで団員を務めたルクウス・アルビニウス・サトルニヌスと一九七〇年頃まで団員を務めたティトウス・フラウィウス・スルピキアヌスは、いずれも補充執政官やアジア属州総督を務めるなど、高職を歴任した人物であり、後者はアルウアル兄弟団員でもある。<sup>(35)</sup>三世紀前半に団員であったマルクス・ガウィウス・ガリカヌスも補充執政官を務め、神祇官など他の祭司職にも就いている。<sup>(36)</sup>二一―二三五年頃まで団員であったガイウス・カエレリウス・フフィディウス・アンニウス・ラウス・ポリティアヌスはマケドニア属州総督を務め、二一三―二一八年まで団員であったルクウス・エグナティウス・ウィクトル・ロリアヌスも上パンノニア属州総督などを歴任している。<sup>(37)</sup>二二四―二四一年頃まで団員であったルティリウス・

ブデンス・クリスピヌスも近ヒスパニア属州総督を務めており、二三五―二五八年頃まで団員であった氏名不詳の人物もトラキア属州総督を務めている。<sup>(38)</sup>一部の団員の史料しか現存していないという問題はあるが、正規執政官就任者の多い成立当初の団員に比べれば見劣りするものの、アントニヌス祭司団では三世紀以降においても重要属州で総督を務めた人物が多く、他の祭司団よりも有力な人物が団員に就任していたことがわかる。

このアントニヌス祭司団記録では、ダムナティオ・メモリアエの決議は順守されている。一方、前節のアウグストゥス祭司団記録では断罪された皇帝の記録が現存している。設置場所以外は似た性質の記録であるにもかかわらず、ダムナティオ・メモリアエへの対応の違いがあることから、元老院決議によって公の場では氏名の削除が徹底されるよう求められていたにもかかわらず、元老院議員自身が直接関与していた記録においても、状況によっては断罪された皇帝の記録が意図的に残されていたということが言えるだろう。では、アウグストゥス祭司団と同様にローマ市郊外の祭司団施設に記録が掲示されていたアルウアル兄弟団では、断罪された皇帝の名前はどのように扱われているのだろうか。

## 四 アルウル兄弟団記録における皇帝名の削除

アルウル兄弟団の起源はロムルス時代にさかのぼるとされるが、前二九年にオクタウィアヌスによって古い祭司団を復興するという形で創設された<sup>(39)</sup>。団員の任期は終身で、二人の団員と在職中の皇帝によって構成されており、ローマ近郊の聖域デア・ディアの杜には団員とその従僕のみが入ることを許されていた。兄弟団はここで、デア・ディア年祭、贖罪供犠、帝室のための誓願や供犠などを行っており、聖域の周囲には浴場、競技場の遺構も残されている。<sup>(40)</sup>アルウル兄弟団については他に類を見ない量の活動記録が現存しており、これは聖域内のデア・ディア神殿にある大理石板に刻まれていた。毎年の活動記録の刻字は年に一度二週間から四週間かけて開催される儀式の中で行われ、文字を刻むための金属の工具を聖域内へ持ち込むことが禁止されていたため、金属持込のための贖罪供犠も毎回実施されていた<sup>(41)</sup>。

この兄弟団記録では、後一四年、五七年、六九年、一八三年、二二一年の記録において、氏名が削除されていることが確認できる。後一四年の記録で氏名が削除された人物が誰かについては諸説あるが、この記録は一六世紀初

めの写本にしか残されていないため、人物同定は困難である<sup>(42)</sup>。五七年と六九年の氏名の削除については、断罪された皇帝であるウイテリウスの名前が一四箇所削除されており、皇帝就任以前の兄弟団員としての活動記録も、皇帝としての記録も消されている。一方、六九年に即位し、後に断罪されたガルバとオトは削除されていない。このウイテリウスの氏名の削除については、オトとその兄弟、ウイテリウスとその兄弟がネロの統治期からアルウル兄弟団に席を持っていたこと、ウイテリウスが同僚であったオトを破滅に追いやったということから、六九年の混乱した政治状況とアルウル兄弟団内部の混乱を反映したものであるとみられている。<sup>(43)</sup>一八三年のコンモドウスの事例では、皇帝在位時の記録において彼の名前は消されており、アントニヌス祭司団記録のような再刻もされていない<sup>(44)</sup>。しかし、皇帝の称号を受け取る前の一七〇年と一七六年の記録については、名前が消されずに残っていることが確認できる。<sup>(45)</sup>彼の治世下の団員で目を引くのは、創設当初からの団員であるガイウス・アッリウス・アントニヌスが一九〇年に、一七五年頃から団員を務めたエグナティウス・カピトが一八三年に、いずれもコンモドウスによって殺されていることである。<sup>(46)</sup>前者は一八六年に幹事を務め、後者はマルクス・アウレリウス期に自宅を宴会の場所に提供しており、

兄弟団の活動に密接に関与していたとみられる<sup>(47)</sup>。そのため、一八三年の記録からのコンモドウス名の削除は、おそらく彼らの殺害に対する兄弟団の意向も反映されているだろう。二三年のセウエルス・アレクサンデルの事例でもアレクサンデルの箇所が削除されているが、その理由を知る手がかりは残されていない<sup>(48)</sup>。彼の治世下と死の直後に団員であった人物は二一名が判明しているが、アレクサンデルの顧問団の一員であったグナエウス・カティリウス・セウエルスのほか、首都長官を務めた人物がキャリア初期に団員となっていたことから、祭司団の重要性が維持されていた可能性もある<sup>(49)</sup>。これは、ゴルディアヌスが即位の翌年に兄弟団の幹事を務めるという皇帝としては異例の行動をしていることにも繋がるであろうが、この点からはアレクサンデルの氏名削除の理由を探ることはできない<sup>(50)</sup>。

これらの氏名が削除された皇帝たちに対し、ネロ、ドミティアヌス、エラガバルスについての記述はいずれも無傷のままで残されている<sup>(51)</sup>。これは、聖域外に設置されたネロの彫像がアウグストゥスへと改変されたことと対照的である<sup>(52)</sup>。すなわち、公に示すモニメントにおいては断罪行為が行われていたのに対し、団員のみが目にする記録では、特に兄弟団内部の混乱がない限り、基本的には断罪された皇帝の名前も残す方針であったと推察される。先行研究で

は、アルウアル兄弟団記録において断罪された皇帝名の削除が行われなかった事例が多いことの理由として、兄弟団記録が聖域内に設置されていた記録であることに加え、聖域への金属の持ち込みと関係者以外の立ち入りが禁止されていたという点があげられている<sup>(53)</sup>。しかし、金属の持ち込みについては文字を刻む際に同時に作業をすることは可能であり、氏名の削除がなされた皇帝名があることから根拠が弱いと言える。むしろ、ウィテリウスとコンモドウスの時期に兄弟団内部での混乱が確認できることから、金属の持ち込み禁止や聖域内部への設置という環境的要因によって残されたのではなく、兄弟団内部の判断を反映して皇帝名の削除の有無が決定された可能性のほうが高いのではないだろうか。

アルウアル兄弟団記録がどの程度「実用」的なものとして参照されていたかを検討したビードは、アウグストゥスの時期には活動記録を刻んで参照することで兄弟団内の儀式を確立する意図があり、それ以降についても細かな変化が記載されていることから、ある程度参照されることが意図されていたとしている。その一方で、別の媒体にも記録が残されていたことを想定した上で、この記録は参照されるためというよりも、碑文に文字を刻むという行為自体が象徴的行為であったという見解も示している<sup>(54)</sup>。しかし、

象徴的なものであったとしても、そこに書かれた記録は兄弟団にとっての歴史であった。それにもかかわらず、削除されるはずの断罪された皇帝の記録は残されたのである。

おわりに

元老院議員はダムナティオ・メモリアエを決議していた。しかし、彼ら自身が団員となっていた宗教祭司団の記録には断罪された皇帝の氏名が残されている例が複数存在し、氏名の削除が徹底されていなかったことを伝えている。それだけではなく、本稿で検討してきたアウグストゥス祭司団記録、アントニヌス祭司団記録、アルウアル兄弟団記録のいずれにおいても、断罪された皇帝への対応が完全に一致する記録は存在しない。(表1) このことから、決議を行った元老院議員たちですら、処分を実行するかどうかを個別の状況ごとに判断していたことがうかがえる。このダムナティオ・メモリアエがどのように伝達され、実施されたかについての見解は、先行研究において一致していない。第一節で述べたように、多くの研究者はダムナティオ・メモリアエは公的に強制されたわけではなく、個々の判断に委ねられた慣習的な行為であったとしているが、クホフのように中央政府が命令を発し、属州や都市当

表1 宗教祭司団記録における断罪された皇帝名の削除

皇帝名	アウグストゥス祭司団	アントニヌス祭司団	アルウアル兄弟団
ネロ	削除		現存
ガルバ			現存
オト			現存
ウィテリウス			削除
ドミティアヌス	削除		現存
コンモドゥス		削除／再刻	削除
マクリヌス	削除		
エラガバルス		削除	現存
セウエルス・アレクサンデル	現存	削除	削除
マクシミヌス・トラクス		削除	

局が断罪された皇帝たちの名前の削除を行う組織的なものであったとする見方もある<sup>⑤</sup>。しかし、決議を発した元老院議員自身がダムナティオ・メモリアエに対して一致した対応をしていないということは、この処分が公的に強制されたものではなかったという見方を裏付けている。

その一方で、先行研究で示されてきたダムナティオ・メモリアエの変化は宗教祭司団記録において確認することはできない。これまでの碑文史料の分析を中心とした研究では、セウエルス期を中心と

した三世紀初頭に、ダムナティオ・メモリアエによる氏名の削除が大規模かつ組織的に行われるようになったという見方がなされている。しかし、本稿で取り上げた記録からは大きな変化は確認できず、むしろエラガバルスやセウェルス・アレクサンデルの氏名が無傷で残されていることが確認できる。更にアルウアル兄弟団記録においては、三世紀よりも一世紀のウィテリウスの事例において徹底的な氏名の削除が行われている。これらの点からは、従来言われてきたような三世紀の変化は元老院議員自身が関与した記録において確認できないことが明らかである。これは、元老院議員たちが決議したダムナティオ・メモリアエ自体に変化が生じたわけではなく、処分が伝達された先で碑文からの氏名の削除を従来よりも徹底的に行うような要素が生じたことをうかがわせる。すなわち、この処分自体が変化したというよりも、これを受け止める社会において記録物に対するなんらかの意識の変化が存在し、その結果が碑文における氏名削除に現れたのであろう。また、祭司団記録と帝国各地に設置された碑文における断罪された皇帝名の削除の徹底度合いの差異からは、元老院議員と碑文習慣が興隆していたローマ社会の間には、「記録」に対する温度差が存在したということも示唆できるのではないだろうか。

## 註

- (1) J. Scheid, *An Introduction to Roman Religion*, Bloomington, 2003, 129-146; Z. Várhelyi, *The Religion of Senators in the Roman Empire: Power and the Beyond*, Cambridge, 2010, 1-2.
- (2) 島田誠「皇帝礼拝と解放奴隷」『岩波講座世界歴史第五巻―帝国と支配』岩波書店、一九九八年、二五五―二五七頁; Scheid, *op. cit.*, 132-138.
- (3) S. Mrozek, "À propos de la répartition chronologique des inscriptions latines dans le Haut-Empire", *Epigraphica* 35 (1973), 113-118; *Idem*, "À propos de la répartition chronologique des inscriptions latines dans le Haut-Empire", *Epigraphica* 50 (1988), 61-64. この研究を元にした皇帝別の一年毎の平均碑文数を示した表は、拙稿「政治手段としてのダムナティオ・メモリアエ―悪帝ドミティアヌスの形成―」『西洋史論叢』第三〇号（二〇〇八年）、一九頁に掲載している。
- (4) M. Kajava, "Some Remarks on the Erasure of Inscriptions in the Roman World (with Special Reference to the Case of Cn. Piso, cos. 7 B.C.)", in H. Solin, O. Salomies, and U.-M. Liertz (eds.), *Acta Colloquii Epigraphici Latini*, Helsinki, 1995, 208-209.

- (15) F. Vittinghoff, *Der Staatsfeind in der römischen Kaiserzeit. Untersuchungen zur „damnatio memoriae“*, Berlin, 1936, 32-33; J. P. Bodel, "Punishing Piso," *American Journal of Philology* 120-1 (1999), 52; S. Benoist, "Titulares imperiales et damnatio memoriae: l'enseignement des inscriptions martelées," *Cahiers du Centre Gustave Glotz* 15 (2004), 175-6.
- (9) Bodel, "Punishing Piso," 52; H. I. Flower, "Rethinking 'Damnatio Memoriae': The Case of Cn. Calpurnius Piso Pater in AD 20," *Classical Antiquity* 17-2 (1998), 163.
- (7) 建築物に設置された碑文「マイルストーン」祭壇「都市の決議では大半が削除されており、解放奴隷の墓碑の言及においてのみ残されている」として W. Eck, "Die Vernichtung der memoria Neros: Inschriften der neronischen Zeit aus Rom," in J.-M. Croisille and Y. Perrin (eds.), *Neronia VI: Rome à l'époque néronienne. institutions et vie politique, économie et société, vie intellectuelle, artistique et spirituelle: actes du VIe Colloque international de la SIEEN (Rome, 19-23 mai 1999)*, Bruxelles, 2002, 287-291.
- (8) A. Martin, *La titulature épigraphique de Domitien*, Frankfurt am Main, 1987, 200-202.
- (6) A. Masino, "L'Erasure del nome di Geta dalle iscrizioni nel quadro della propaganda politica alla corte di Caracalla," *Annali della Facoltà di Lettere e filosofia dell'Università di Cagliari* N.S. 2, 1981, 63-81. 同様のヤウハリスの弟との混同は *CIL* III 5802; VIII 2557; XIV 324 で確認できる。また「上書された文言の内容から、ゲタの氏名の削除と修正が二一四年以降にも行われていたことが示されている」。
- (10) W. Kuhoff, "Il riflesso dell'autorappresentazione degli imperatori romani nelle province dell'Africa (I-III sec. d.C.)," *L'Africa romana* VII, 1990, 957-960.
- (11) パピルスにおけるゲタ名の削除を調べたメルテンスは「現存する三九例の内、二七%で氏名の削除が行われており、最も割合の高いオクスリントスでは五七%、最も低いファイユームでも一八%で削除が行われたほか、氏名の修正も行われた」として P. Mertens, "La «damnatio memoriae» de Geta dans les papyrus," *Hommages à Léon Hermann, Collection Latomus* 44, 1960, 541-552.
- (12) Benoist, *op. cit.*, 175-189; H. I. Flower, "Memory Sanctions and the Disgrace of Emperors in Official Documents and Laws," in R. Haensch (ed.), *Selbstdarstellung und Kommunikation: Die Veröffentlichung staatlicher*

*Urkunden auf Stein und Bronze in der Römischen Welt Internationales Kolloquium an der Kommission für Alte Geschichte und Epigraphik in München (1. bis 3. Juli 2006)*. Vestigia 61, München, 2009, 409-421.

- (13) R. MacMullen, "The Epigraphic Habit in the Roman Empire," *American Journal of Philology* 103.3 (1982), 233-246.

- (14) テイトウス・タティウス王が創設し、アウグストゥスが復活させたテイトゥス祭司団を手本にしているとされる。古来は卜占に携わったとウァッロが伝えている。Tac., *Ann.* 1. 54; *Res Gestae* 7; Varro, *Ling.* 5. 85. アウグストゥスの宗教復興や祭司団の創設については小堀馨子「『アウグストゥスの宗教復興』に関する一考察—古代ローマ帝政初期（アウグストゥス時代）の宗教事情について」『東京大学宗教学年報』第一二号（一九九五年）、七二—八六頁、同「『アウグストゥスの宗教復興』の再検討」『宗教研究』第三二四号（一九九七年）、五一—七四頁。

- (15) Tac., *Ann.* 1. 54. クラウディウスの神格化以降は名称が追加されて *Sodales Augustales Claudiales* になる。名称からアウグスターレスと混同されることもあったが、この祭司団はアウグスターレスと関係ない。J. Linderski, "Augustales and Sodales Augustales," *Roman Questions II*.

帝政前期ローマにおける皇帝名の削除と宗教祭司団記録

*Selected Papers*, Stuttgart, 2007, 179-183. ハンスバンハムスの死後には同様にフラウィウス祭司団 *Sodales Flaviales* が創設され、ハドリアヌスの死後にはハドリアヌス祭司団 *Sodales Hadrianales* が創設された。

- (16) J. Rüpke, *Fasti Sacerdotum: a Prosopography of Pagan, Jewish, and Christian Religious Officials in the City of Rome, 300 BC to AD 499*, Oxford, 2008, 9-10 (エド・FS 省略); I. Gradel, *Emperor Worship and Roman Religion*, Oxford, 2002, 181-182 注。ウィーランドギストリのフリーズにおいてクラウディウスの近くに描かれている、冠をかぶりトーガを身に纏いパトリキの靴を履いた三人の人物が、アウグストゥス祭司団員ではないかと推測している。S. Estienne, "Sodales Titii, sodales Augustales (Claudiales), Flaviales (Titiales), Hadrianales, Antoniniani," *Thesaurus cultus et rituum antiquorum V*, Los Angeles, 2006, 94.

- (17) Estienne, *op. cit.*, 93-94.

- (18) Tac., *Ann.* 2. 83. 1; *Tabula Hebana*, 51-52. ゲルマニクスの死に際し、劇場のアウグストゥス祭司団専用席にゲルマニクスのための高官椅子を設置することが決議されている。: *Tabula Hebana* 54-62. ゲルマニクスの命日には、毎年アウグストゥス祭司団の指示によって犠牲式が行われた。: *Senatus Consultum de Cn. Pisone Patre* 82-84. アウグス

トウス祭司団によってゲルマニクスの彫像がカンプス・マルティウスに建てられている; Cass. Dio, 59. 7. 4 アウグストウス神官団員たちがカリグラと一緒に競技を観覧している; Suet. *Dom.* 4 フラウィウス祭司団員たちがドミニティアヌスと共に競技を観戦している。

- (19) G. M. De Rossi, *Bovillae (Forma Italiae. Regio I. XV)*, Firenze, 1979, 298-323.

- (20) 団員加入記録 (CIL VI 1984=ILS 5025) 幹事団員記録 (*Inscr. It.* XIII 29=CIL XIV 2388-2392) ° CIL VI 1992=XIV 2396 ヲ CIL VI 2000=XIV 2398 ヲ トゥンブス・トウス祭司団記録 ヲ トゥンブス・トウス祭司団員 G. Di Vita-Evrard, "Les fastes des sodales Augustales," in M. Mayer and J. Gómez Pallarès (eds.), *Religio deorum. Actas del coloquio internacional de epigrafía, culto y sociedad en Occidente, Tarragona*, 1983, 471-484.

- (21) CIL VI 1984=ILS 5025

- (22) *Inscr. It.* XIII, 311.

- (23) ネロの場合にはネロ・クラウディウスの部分が消されている。一方、マクリヌスの場合にはセウェルスの部分だけが残され、その前後の部分が消されている。このことから、これらの氏名の削除は別の時期に行われた可能性が高い。

- (24) Suet. *Nero* 35.

- (25) Q. Aradius Rufinus Optatus Aelianus (*PIR*<sup>2</sup> A 1016=FS 706; M. Caesellius M. f. Laelianus (FS 1018; CIL VI 41218=AE 1967, 56), B. Borg, *Crisis and Ambition: Tombs and Burial Customs in Third-Century CE Rome*, Oxford, 2013, 33.

- (26) Q. Petronius Melior (*PIR*<sup>2</sup> P 290=FS 2661; CIL XI 3367=ILS 1180), D. Roger and C. Giroire, *Roman Art from the Louvre*, Easthampton, 2009, 109-110.

- (27) *HA.* Ant. Pius 13; Pert. 15.

- (28) 皇帝が神格化される度に祭司団名が追加されたため、最終的に Sodales Marcianus Antoninianus Commodianus Helvianus Severianus Antoninianus ヲ トゥンブス・トウス祭司団員と記述される。

- (29) S. Panciera, "Un nuovo frammento dei Fasti di cooptazione dei Sodales Antoniniani," in S. Cagnazzi, M. Chelotti and A. Favuzzi (eds.) *Scritti di Storia per Mario Pani*, Bari, 374.

- (30) M. Beard, "Documenting Roman Religion," in *La mémoire perdue. Recherches sur l'administration romaine*, Roma, 1998, 86.

- (31) 祭司団創設神祇の団員たち M. Pontius M. f. Laelianus Larcus Sabinus; L. Venuleius Apronianus Octavius Priscus; L. Octavius Cornelius P. Salvius P. f. Iulianus

Aemilianus; Q. Pompeius Q. f. Sossius Priscus; L. Dasumius P. f. Tullius Tuscus; T. Pomponius Proculus Vitrasius Pollio; C. Brutius C. f. Praesens; N. Nonius M. f. Macrinus; C. Aufidius C. f. Victorinus; M. Vettulenus Sex. f. Civica Barbarus; Anonymus; \*\*\* Fidus A \*\*\* Gallus Paccianus; M. Didius M. f. Severus Iulianus<sup>1) 48-89°</sup> H-G. Pflaum, "Les Sodales Antoniniani de l'Époque de Marc-Aurèle," *Mémoires présentés par divers savants à l'Académie des inscriptions et belles-lettres de l'institut France* 15-2, Paris, 1967, 141-235; Idem., "Les Sodales Antoniniani," *Comptes-rendus des seances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 105-2 (1961), 120; FS 283.

- (32) Panciera, *op. cit.*, 373-383.
- (33) Panciera, *op. cit.*, 378.
- (34) *CIL* VI 2001.
- (35) L. Albinus A. f. Saturninus (*PIR*<sup>2</sup> A 477=FS 554); T. Flavius T. f. Sulpicianus (*PIR*<sup>2</sup> F 373=FS 1713).
- (36) M. Gavius Gallicanus (FS 1819).
- (37) C. Caerellius Fufidius Annius Ravus C. f. Pollitianus (*PIR*<sup>2</sup> C 157/9=FS 1010); L. Egnatius Victor Lollianus (*PIR*<sup>2</sup> E 35=FS 1516).

- (38) Rutilius Pudens Crispinus (*PIR*<sup>2</sup> R 257=FS 2943);

帝政前期ローマにおける皇帝名の削除と宗教祭司団記録

Anonymus (FS 72, AE 1907 48); H-G. Pflaum, "Un nouveau sodalis Aurelianus Antoninianus à la lumière d'une inscription de Philippopolis Thraciae," in R. Chevallier (ed), *Mélanges d'archéologie et d'histoire offerts à André Piganiol* 1, Paris, 1966, 275-282.

- (39) *Res Gestae* 7. アルヴァル兄弟団記録については阪本浩「エリウス＝クラウディウス朝期のアルヴァル兄弟団記録」佐藤伊久男・松本宣郎編『歴史における宗教と国家——ローマ世界からヨーロッパ世界へ——』南窓社、一九九〇年、一〇一〇頁を註する。

- (40) ローマから南西に約・五キロほどの所に位置する<sup>2)</sup> J. Scheid, *Romulus et ses frères: Le collège des frères arvales, modèle du culte public dans la Rome des empereurs*, Rome, 1990, 73-76; 95-182; E. Venditti, *Le memorie degli Arvali alla Magliana: sintesi storico archeologica sul collegio sacerdotale dei Fratres Arvales e sui luoghi del loro culto pubblico alla dea Dia ai tempi di Roma imperiale*, Roma, 2005.

- (41) 本稿では J. Scheid, *Commentarii Fratrum Arvalium qui supersunt: les Copies épigraphiques des Protocoles annuels de la Confrérie Arvale* (21 av.-304 ap. J.-C.), Roma, 1998 のテキストを参照する<sup>3)</sup>。(以下 CFA を略

す。)シャイドは記録刻印の時期と場所をまとめているが、記録を刻印する場所が僅かになってしまった三世紀には、壁面だけでなく机にまで記録を刻んでおり、活動記録を残すことに対する熱意が感じられる。Scheid, *Romulus et ses freres*, 82-88.

- (42) グナエウス・カルプルニウス・ピソのものであると考えられてきたが、フラワーは紀元後一六年にメモリアに対する断罪が決議されたルキウス・スクリボニウス・リボ・ドルススではないかとしている。Flower, *Art of Forgetting*, 228.

- (43) R. Syme, *Some Arval Brethren*, Oxford, 1980, 3; Flower, *Art of Forgetting*, 225-228; 阪本浩「アルウル兄弟団の政治的役割」『西洋史研究』第二一号(一九九二年)、一一一―一四頁。

- (44) CFA 94.

- (45) CFA 86 (一七〇／一七六年) では即位前のコンモドゥスの名は消されていない。CFA 88 (一七六年) の即位前のコンモドゥスの到着を記念した文章ではコンモドゥスの名は残されている。ピガニオルはこの碑文を一七六年のものであり、発見されたのはローマ市内であるものの、テキストの内容などから、確実にデア・ディアの森に掲示されていたアルウル兄弟団記録の一部であるとしている。A.

Piganiol, "Note sur un fragment d'inscription arvalique," *Melanges d'archeologie et d'histoire offerts a Charles Picard a l'occasion de son 65e anniversaire*, tom 2, 1949, 822-824.

- (46) C. Arrius Antoninus (*PIR*<sup>2</sup> A 1088=FS 717; HA. Com. 7; Pert. 3); Egnatius Capito (*PIR*<sup>2</sup> E 17=FS 1514; HA. Com. 4)

- (47) CFA 90; 95a.

- (48) CFA 106.

- (49) Cn. Catilius Severus; T. Statilius Silianus; T. Flavius Archelaus; L. Armenius Peregrinus; Novius Severus Pius; M. Flavius Alpinus; P. Aelius Coeranus Junior; L. Alfenius Avitanius; L. Caesonius C. f. Lucillus Macer Rufinianus; P. Aelius Secundus; M. Iunius Hermogenes; M. Saenius Donatus; Statilius Severus; C. Porcius C. f. Priscus Longinus; L. Fabius Fortunatus Victorinus; C. Annius Anullinus Geminus Percennianus; L. Flavius Honoratus Lucilianus; L. Lorenus L. f. Crispinus; L. Iasdius Aemilianus Honoratianus Postumus; P. Manilius Aemilius Pius; Maecius Marullus 一方、団員経歴の分析を行ったシャイドは、記録が削除されているコンモドゥスとセウエルス・アレクサンデルの時期のいずれも、団員は元老院議

員としては中程度の経歴であったとしている。コンモドゥスの時期にはイタリア半島や西方属州出身者だけでなく東方属州出身者が増加しており、セウエルス・アレクサンデルの時期にはその割合が二対一程度になっていたとされるが、これは他の宗教祭司団も同様である。J. Scheid, *Le Collège des Frères Arvales. Étude Prosopographique du recrutement* (69-304), Roma, 1990, 240-250; 261-263.

(50) CFA 113.

(51) ネロ (CFA 20; 22; 24; 25a-b; 26a; 27; 28 a-f; 29; 30; 31; 37; 38) ユーティアンヌス (CFA 43; 45; 46; 48; 49; 52; 54; 55; 57; 58; 59) エミガバルス (CFA 100)。

(52) E. R. Varner, *Mutilation and Transformation: Damnatio Memoriae and Roman Imperial Portraiture*, Leiden, 2004, 61-62.

(53) Eck, *op. cit.*, 292; Flower, *Art of Forgetting*, 224.

(54) M. Beard, "Writing and Ritual: a Study of Diversity and Expansion in the Arval Acta," *Papers of the British School at Rome* 53 (1985), 136-139.

(55) Kuhoff, *op. cit.*, 955.